

臺灣古代文化の謎を語

る

寺
坂
毅

石坂圖南先生は少壯にして一劍投荒の嘗時、人間容易に到り難い未開の東部臺灣を困苦探險し千古の秘區を探り、踏査實記、北臺灣の古碑、基隆港等の著書を照會し臺灣古代文化の研究に従事し、基隆郷土館に其の豊富なる蒐集品を公開し世人は其の益を享くること甚だ多い。筆者は渡臺の際親しく先生と會し社寮島に案内を得て次ぎの臺灣古代文化の謎を聞くことを得た。

基隆驛より約一里十六丁の社寮島は今より

僅か三百餘年前、鄭氏が仙洞に陣所を構へ社寮島を占據せる和蘭人を攻撃し基隆港を封鎖した際、和蘭軍は本島と社寮島との間を當時樹林鬱蒼として晝尚ほ暗き海峽、現在の八尺門より密かに遁逃したと傳へられてゐる。現在の八尺門を見れば到底想像もつかない變りやうではあるが、今でも土民は其の昔猿類が梢づたひに本島と社寮島間を去來したと語つて居ることから考ふれば、幾千百年前にはこの地が陸續きであつて、千古不磨の石文や其の時代に使用された器物の存在によつて當時の光明に接することが出来るのは極めて愉快である。

本島の一角に屹立し眼下に見る社寮島を指す方向は同島出土の太古石文の出所なのである。方五寸、長三尺三寸五分の砂石柱に鐫り附けられた古文字、この怪文字碑出土の社寮島は基隆灣頭の北東方に位し、北方三紀の砂岩より成る小島で孤立の別天地である。西人の所謂「パーム」Palm 島で、北に接して「ボッケンアイランド」山羊島即ち中山仔嶼と呼ばれる嶼があり、西方には「ブッシ」Bush 即ち桶盤嶼があり皆同紀岩層であ酸ア

ムモニア・鏝・大豆粕・木材等である。これ等の貿易は基隆・高雄の二港により行はれる。なほ西部海岸に悟棲の築港が行はれてゐる。

關
稅

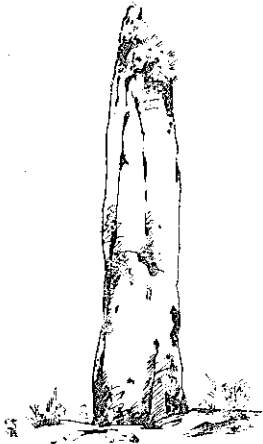
從來本島の貿易行政に就いては、關稅法の一部を施行してゐたのみで、外地貿易行政の統一上種々不便があつたが、昭和十二年八月から改正勅令により、朝鮮・樺太・南洋諸島の如く關稅法全部を本島に施行し、關稅統一が出来ることとなつた。

金
融

發券銀行たる臺灣銀行の外に臺灣商工・彰化・華南・臺灣貯蓄の四行がある。その他日本勸業銀行及び三和銀行の支店がある。なほ臺灣及び南支・南洋に於ける拓殖事業の經營及び拓殖資金の供給を目的とする特殊會社たる臺灣拓殖株式會社が昭和十一年十一月、南洋拓殖株式會社が同十四年十二月に創立された。土地經營・栽培事業・農業移民事業・金融事業等をその主なるものとする。

(太田正孝・新經濟辭典に據る)

・舞鶴台上の巨柱



る。此の小島には山あり、谷あり、平地ありて、樹木蒼蒼の間に村落が隱約して雅致に富んだ纏つた箱庭の感がある。今から三百八年前西班牙人が此の美しい島を占領し、城塞を築き土蕃の教化に務め又貿易に従事して居つたが、後に南臺灣に威を逞うした和蘭人に奪はれ、和蘭人は又間もなく鄭氏の逐ふ所となつたのである。この時代の歴史を語るものに、社寮島と中山仔嶼との中間に蘭人の遺した石文蕃字洞がある。

臺灣が亞細大陸の縁邊より脱離した後、所謂地殻の輪廻や、地震、火山、暴風、洪水等により臺灣の全體又は一部分に大小幾多の地塊運動のあつたことは想像に難くない。特に東臺灣の太平洋沿岸は逆落して深さ四千尋の海を抱いて居る。臺東廳の白守蓮や花蓮港

地方新港社等に散在して居る石槽は、或る時代に文化の發達した種族が東臺灣に割據したが、大地の地變に遭遇しその種族は全滅し去つた遺跡であつて、其後更に支那より、蒙古人種、マライ人種、琉球、内地等より種々雑多の人種が此の地方へ移住したものと隠断することが出来る。北部臺灣に古くより獨占的に盤踞せる「ケタガラン」蕃族が一般に信じて居る傳説によれば、此の蕃族は其の元「サナサイ」「サンサイ」又は「サマサイ」(花蓮港の「タツキレ」又は火燒島なりとの説)に在つた時、或る日突然日月共に蝕して天地皆黒、光なきこと數晝夜の間に住民は悉く斃死したが、偶然にも二人の兄妹が生き残り神に告げて兄妹婚を結び其の子孫大に繁殖し今の「ケタガラン」蕃の鼻祖をなしたと傳へて居る。

此の數日に亘る天地晦冥民人斃死のことは海岸山脈の大地にりかど夢のやうに思はれぬでもない。現在臺東方面に棲息する蕃人は太古の文明に就ては聊かも語る所がない。勿論白守蓮の石槽などは彼等の夢にも考へて居ない。此等の巨石文化時代は大天災地變前のもの

臺灣工藝品一覽圖

品種	作品	主要生産地
刺繡		臺北、臺南、臺中
染色		臺南、高雄、臺北
金銀細工	腕輪、指環、首飾、耳飾	臺北、臺中、臺南
錫細工	燭臺、香爐	高、臺南、臺中、臺北
鍍金		臺北、臺南、臺中
陶磁器	飲食用器物、家具	臺北、臺中、新竹
硝子製品		臺北、新竹、臺南
提燈	支那形、内地形	臺中
蓮草紙		新竹、花蓮港
竹細工品	籠、蓆、其の他	臺中、高雄、臺南
籐細工品	網代細工品、椅子、バスケット	新竹
蘭蓆	七島蘭蓆、青蓆	臺北、臺中、高雄
大甲蘭製品	下駄表、卷煙草入座蒲團、札入	新、臺北、臺中、臺南
支那形靴		高、臺中、臺南
洋杖	木製、蛇皮製	臺北、臺中、臺南
蛇革製品	蓆、口	臺北
角細工品	櫛、其の他	臺北、臺南
水牛磨角		臺北、臺南、臺中
珊瑚製品		臺北、臺南、臺中
人形	紙製、土製	臺北、臺南、臺中
帽子	紙製、マニラ麻帽	高、臺南、臺中、臺北
漆器	大甲帽、煙草セット	臺中、新竹、臺南
木製品	箱、割物等	高、臺中、臺北
文石細工品		臺南、臺北

(臺灣總督府殖産局商工課工業彙報第九號より)

- ・ケタガラン蕃族の記號文字
- ・ケタガラン蕃族の彫刻紋様
- ・社寮島出土の太古石文



のかと想像される。

舞鶴臺上の巨大なる石柱は土民はこれを「カララ」と謂ひ昔彼等の祖先に「プトン」と云へる神人あり或時同族中に雙子産れしを甚しく不吉とし一村他へ立退いた時の家の柱が石に化したと傳へてゐる。いつの世何人が何の必要あつて何處より運搬し來り、而も地下五六尺地上二十餘尺の巨柱を建てたのか、又蘭陽の員山、新城より花蓮港、南は恒春の墾丁寮に至る東臺灣一帯に散在する繼ぎ合せの「スレート」石棺は何者の手に依り作られたものか、石棺は現在各蕃人の敬て爲さるる埋屍法であつて或は一種文化民族の遺物かとも思はれる。

臺灣東岸に跡されたる石柱、石槽、石棺、石文、石器等は相當文化を有したる二三種の古代人類が何所よりか渡來生存したが或時代彼等は地震や地亡や海嘯や火山の爆發などによつて廢滅に歸した名残であらう。臺灣に於ても更に古い時代人類が生存したのかも知れぬ。或は彼等の一部が生残つて独自の文化を築いたかも知れぬとの疑ひも強ち捨つべきものでもなく古代文化の謎である。